

「いじめ」について

青木 悦 (教育ジャーナリスト・会員)

「文部科学大臣からのお願い」

11 月末、ある小学校の P T A で講演した。その日、文部科学省から各学校宛、「文部科学大臣からのお願い」というのが配られた。私も 1 枚もらった。学校ではこれを増刷して全生徒から全家庭に配るのだという。

文面は一見、何ということはない。表(どちらが表か裏かわからないが)には子どもに向けた文章がある(もしこっちが裏なら・・・と思うとまた考え込んでしまう)。「未来ある君たちへ」とタイトル、そして「弱いたちばの友だちや同級生をいじめるのは、はずかしいこと。(略)君たちもいじめられるたちばになることもあるんだよ」などと続き、「いじめられて苦しんでいる君は、けっして一人ぼっちじゃないんだよ。(略)いじめられていることを話すゆうきをもとう。話せば楽になるからね。きっとみんなが助けてくれる」と結ばれている。

裏には「お父さん、お母さん、ご家族の皆さん、学校や塾の先生、スポーツ指導者、地域のみなさんへ」とあって、日付はどちらも平成 18 年 11 月 17 日となっている。

「いじめ」によると思われる子どもの自殺が相次ぎ、マスコミのとりあげ方も問題ありだけれど、日本中、ちょっとしたさわぎになっている。私のところにも「また、いじめが流行りはじめたのですね」とか、「どうして今の子はあんなにかんたんに死ぬのですか」などの声が届く。「いじめ」は 30 年も前から始まっていて、流行するものではない、かんたんに死ぬ子などいません、自殺した子どもたちをかんたんに死ぬ」ととらえる大人の方に冷酷さを感じますよ、などと応えているけれど、教育再生会議の動きや、「いじめ」報道の嵐の中に教育基本法改悪や少年法改悪が埋没させられて進められたことを考えれば、怒りと哀しみがいっしょになって立つ処がグラグラしてしまう気分になる。

文科省の感性こそが「いじめ」

とりあえずここでは文科省の大臣名で出された文章を考えながら、「いじめ」について思うことを書く。

「いじめ」は私の知る限り、30 年ほど前から始まり、それによると思われる自殺は、20 年ほど前から何度か増加の山を数えながら経過している。その間にも子どもの自殺は一定数つづいていて、特に増えたとか減ったとかについてはわからない。遺書がなければ「いじめ」が原因かどうかもわからないから、マスコミは大きく報道もしなかった。

文科省の文章のおかしさはまず、「未来ある君たちへ」というタイトルにある。未来がないから死んでいった子どもたちに、その子どもたちと同じ気分にいる子どもたちに「未来ある」と呼びかける、この鈍感さ！ 死んだ子といま生きている子を分けるこの感性が「いじめ」そのものなのである。子どもたちを「いい子」「悪い子」「できる子」「できない子」とどんどん分断した結果、その中で自分より下位の子をさがす行為が「いじめ」なのに、文科省自体がやっぱりその分断の作り手であることを証明するタイトルを付けたと、私は思った。子どもの苦しみをわかって呼びかけるのならこんなタイトルは要らない。ただ、「死なないでくれ。つらいから」と言えばいい。

次に「弱いたちばの友だちや同級生をいじめるのは、はずかしいこと」と言っている。そんなこと、子どもたちは百も承知だ。いま子どもたちが居る世界の「いじめ」は、「弱いたちばの人」をいじめるのではない。いじめられるから「弱いたちば」になるのだ。「いじめ」は、平等(これを同質と思っている子が多く、ここが一番の問題点だと思うが)の中に「弱い」ものを作り出す行為であって、「弱いものいじめ」ではない。

昔のいじめと、いまの「いじめ」

いま 70 代以上の人たちがよく言う。「戦争中など、軍隊や疎開先でもいじめはあった。私たちはそれにじっと耐えた。今の子は弱すぎるのではないか」

。私も何度か、こういう言い方を耳にした。

しかし、昔のいじめと、いまの「いじめ」は全く違う。昔のそれは、上官が下の位の兵士をいじめる、あるいは古参兵が新入りをいびる、あるいは疎開先では食料を持つ人が持たない人をいじめる、見せびらかすといい、真の「弱い者いじめ」である。いわばいじめられる側に、「卑劣な奴らめ！」と思うことのできる正義があった。

いま子どもたちが学校という場で行う「いじめ」は、「この瞬間からお前はこの集団の中の、下の位置になったんだぞ」と思い知らせる行為であって、そうされた子どもはまず何よりもショックを受ける。なぜぼくが、なぜ私がそうなるの？ 今まであんなになかよしだったのに、あんなに気をつけて、ハズされないようにしてきたのになぜ？ となってしまう。つらいのは、昔のいじめのように、こっちに正義を感じられないこと。相手がひどいと思う余裕もなく、自分のどこが悪かったのかと思ひ始めてしまうこと。

はじめから存在した上、下の階級や身分の中で上からやられることに対しては、下の者は心の中でそのことの不当性を怒ることができた。その当時、そうできたかどうかは私は知らない。今になって「昔のいじめに耐えてきた」などと言う人の多くは、戦後の平和憲法の下、自分たちのやられたことは不当だと認識することができて、当時のことを「私は耐えぬいた」などと“美化”しているのではないかと、私は少々いじわるかもしれないが思っている。

「なかよし」がいなくてもいい

さらに「いじめた子を出席停止にする」などと言ったりしながら、一方では文科省の呼びかけは「君たちもいじめられるたちばになることもあるんだよ」と言う。ほんとにバカにするな！と言いたくなる。「君たちもいじめられるたちばになる」のなら、「いじめた子を出席停止にする」ことは、全ての子どもを出席停止にすることになる。これは呼びかけではない。脅しの文章だ。

どうやったらこんな脅しの文章を、思いやりの文章だと思って書くことができるのだろう。子どもの実情を知らない、「いじめ」の真の姿を知らないためだろう。知ろうとも思わないのだろう。こんなに子どもを侮辱できるのだから。

そういう人たちが教育に関する法律を作ったり変えたりする。そういう人たちの方に、子どもの気持ちがかかっているはずと思っていた人たちがとりこまれていく。力あるものの方に引き寄せられ、屈伏させられ、その上苦しんでいる子どもたちに高いところから「君たちへ」などとのたまう。これ自体が「いじめ」の構造である。

自分が「弱いたちば」だとラクインを押された(ある「いじめ」にあったことのある子どものことば)とき、強烈なさみしさに襲われ、生きていくのがつらくなるという子どもたちの姿は、私たちに子どもは親よりも教員よりも子ども社会で認められることが大切と感じている事実を教えてくれる。他に生きる場所はあると何度伝えても、この時のショックを埋めるのは何年もの年月、つまりその子の成長が必要だった。埋めるのはその子自身なのである。せめて、ラクインを押すことは誰にもできないこと、押される筋合いもないこと、人は全部違うのだから、ひとりの時もあっていいこと、私は私、ボクはボク、「なかよし」がいなくてもいいことなど本気で伝えたいと思う。

(あおき・えつ)